

「青い眼」は何を見たか： トニ・モリスンの『青い眼が欲しい』より

半藤 正夫*

(平成10年10月31日 受理)

What Pecola saw with her bluest eyes: a literary exploration
in Toni Morrison's *The Bluest Eyes*

Masao HANDO

A tragic heroine of Toni Morrison's first novel, *The Blues Eyes*, lives in a small-town where people has taken the values from the larger white American culture, believing blond hair, blue eyes, light skin and keen features are the measures of beauty for them, which are not norms for black people. So Pecola hopes she will be accepted and loved only when she has the bluest eyes of all. Because of her ugliness, however, she was insulted by playmates, rejected by school teachers, yelled at by neighbors, rendered invisible by shopkeepers, and raped and impregnated by her father, and she retreats into insanity because she couldn't find any place in the "real" world, where there is healthy, sane place for her.

Insanity, death, and violation of a society's norms which recur in the later works by Morrison's, are some major literary themes in Morrison's novels. Here in this paper, I want to explore how these literary themes come out with her ambitious techniques in her first novel, *The Bluest Eyes*, and how they developed and changed into her later works beautifully to create Morrison's great literary world.

Key words : racism, gender, feminism

1 はじめに

トニ・モリソンは『タイム誌』とのインタビューで、もし黒人がこの国にいなかったらそれぞれの移民がそれぞれの国に分かれ互いに相反目し弱小国同士の争いとなっていただろう。だが黒人がいたからどの移民たちも自分たちの下には黒人がいるのだという安堵感を抱き、だから最後の一線の一つの国家としてまとまっていくことができたのである。だれも自分たちがボトムの下層階級だとは絶対に思わなかった。なぜなら彼等はわれわれの下には黒人がいるのだ、と常に思うことができたからだ、⁽¹⁾と語っている。

歴史をひもとくまでもなくアメリカの社会は黒人との深い関りの上に成り立ってきた。社会だけでなく、文学もその例外ではない。ただ黒人文学がアメリカ

*アメリカ文学 助教授

文学のキャンノンに組み込まれたのはごく最近であり、それまではアメリカ文学と言えば白人の男性の文学であったし、アメリカ人と言えば特別な状況を除いてそれは白人であった。「アメリカ合衆国の有力な文芸批評家のなかには、どんなものでもアフリカ系アメリカ人のテクストは決して読まず、またそう明言するのを誇りにしている人がいる。・・・ アメリカ文学にたいする批評眼をもった裁き手たちが、アフリカ系アメリカ人のテクストにたいする無知を喜びとし、事実、それを楽しんでいるように見えるのは興味深い現象で、驚くには当たらない。」⁽²⁾とモリスンは言い切っている。

さて黒人として、また女としていわれなき差別と屈辱を味わってきたモリスンがその作品を通してアメリカ社会に生きる黒人たちの問題や苦悩を表出していないはずはない。ところがノーベル文学賞授賞後に発表した『パラダイス』の冒頭の文に「彼等はまず白人の女を撃つ」と、「黒人」ではなく「白人」とはっきり書いたことに関してインタビューを受けた彼女はこう答えている：

“Race is the least reliable information you can have about someone. It’s real information, but it tells you next to nothing.” ⁽³⁾

アメリカ文学における黒人女性の正当な地位を要求してひたすら活動して来た彼女の口から人種の問題についてこのような言葉を聞くとはいささか驚きである。しかしこれはモリスンのこれまでの主張となんら矛盾するものでない。彼女の主張は人種的カテゴリーを用いて人間をグループにわけることこそが人間から活力を奪い排他的な考えにさせる元凶だと強く主張してきたのだから。しかし、ここまで言い切るモリスンに筆者はどこか余裕のようなものを感じる。つまりモリスンは第7作目にして人種や皮膚の色の違いを超えて真の人間性に迫る文学作品を世に問うことができたと言う、自信に満ちた発言に思えるからである。

しかしノーベル文学賞授賞に関してはスウェーデンの選考委員会が 文学的基準より地域の政治的配慮 (“geopolitical rather than literary criteria”) によって授賞者を決めたのではないかという意見も出たりしたが、彼女はこれは自分の作品が公に認められた証しであって、授賞によって自分の作品の中身が変わることはない素直に喜びを表明している。黒人として、女性として、作家として自分の責務を人一倍自覚し、その使命感に突き動かされて書いて来た⁽⁴⁾モリスンはこう述べている：

“I was surprised at how patriotic I felt, being the first native-born American winner since Steinbeck in 1962. I felt pride that a black and a woman had been recognized in such an international forum.” ⁽⁵⁾

さてモリスンはこれまで7つの小説（『青い眼が欲しい』、『スーラ』、『ソロモンの歌』、『ターベビー』、『ピラヴド』、『ジャズ』、そして『パラダイス』）を発表してきたが、彼女の作家としての主張と文学上のテーマはすでに処女作『青い眼が欲しい』においてその萌芽を見ることができると筆者は考える。そしてそれは作品を追

うごとに力強くより明確に表出されいくのだが、本稿ではその処女作『青い眼が欲しい』を取り上げ、そこに見られる文学上のテーマと技法を検証しつつ、それがその後の作品にどのような影響を与え、どのように展開されていったかを述べてみたい。

2 モリスンの語りと技法

家庭崩壊した The Breedloves (ブリードラヴ家)に生まれ、貧しさのどん底を生きるピコーラは、その上醜さという仮面までつけられていた。だがこの黒人少女ピコーラは一つの願望を抱いていた。だれもが認める美しさの証し「青い眼」を手に入れることだった。そのためにピコーラは毎日神に祈った：わたしに「青い眼」を下さい、と。「青い眼」こそ自分をこの世の苦しみから救ってくれるものだと思っていた。だがその願いも空しくピコーラは世間からも、友達からも、すべてのもから弾き出されて、最後には狂人の世界に突き落とされてしまうのである。一見少女小説の観を呈すこのモリスンの処女作『青い眼が欲しい』は、発刊当初は売れ行きもよくなく、注目する人も少なかった。しかしその後のモリソン文学のフォルムはすでにここに胚胎していたのである。

まずこの作品は極めて実験的な技法が駆使されている。モリソンは我々読者の意表を突いて、小学校の読本教科書、「デックとジェイン」の一節を冒頭に載せてくる：

Here is a house. It is green and white. It has a red door. It is very pretty. Here is the family. Mother, Father, Dick, and Jane live in the green-and-white house. They are very happy....(以下省略). (3) ⁽⁶⁾

これはいかにも幸せな白人家庭の描写である。父と母、そして二人の子供、デックとジェイン、そして白い大きな家、緑の庭、たわむる小犬と猫……。アメリカ社会ではだれもが望む理想の家庭像である。

ところがこれが二度目の提示になると句読点がなく、大文字小文字の区別もなくなり、文体の乱れは読者の眼を惹くようになる：

Here is a house it is green and white it has a red door it is very pretty
here is the family mother father Dick and Jane live in the green and
white house they are very happy..... (3)

白人優位のアメリカ社会で、なりふりかまわず幸せを掴みたいと努力する黒人家族の姿を描いているとも読み取れる。黒人たちが黒人としての自己認識を捨てた姿だとする評者もいる。

そして三度目になる判読困難なアルファベットだけの羅列となり、もはやそれは文章ではなくなっている：

Here is a house it is green and white it has a red floor it is very pretty here is the family mother father dick and janel live in the green and white house they are very happy..... (3)

三様に書き分けられたこの一節は一体なにを表現しているのだろうか。少なからず読者の想像力をくすぐる。いくら努力しても所詮は黒人、白人社会からははじき出され、酷使され、搾取されるだけ。黒人が生きる道は己を壊し、己を消し去る以外ないと言っているようにもとれる。なんの主張もできず何の意味も持てない黒人は見えない存在でしかない。エリクソンの小説『見えない人間』を想起させるこの一節は確かに文字は並んではいるが文としての意味を持たない、従って存在しないと同じなのだ。この小説を読み終えた読者ならこれは悲劇の渦中に放り出されたブリードラヴ家の人々を描いたものだと考えることも出来よう。家族のだれもがばらばらで、もはや「家庭」といえるものは存在していないのだから。あるいはその「家庭」を「国」に置き換えて見ると、建国当初はしっかり統制がとれて立派に機能していた白人社会が、いまや墮落し、遂には不安と混乱の渦の中で崩壊しかけている現代のアメリカ社会の投影だとも取れるのではないか。

冒頭から読者を惹きつけたモリスンはさらに技巧を凝らす。次のページには惜し気もなく読者にナラティヴの核心部分を知らせるのである：

Quiet as it's kept, there were no marigolds in the fall of 1941. We thought, at the time, that it was because Pecola was having her father's baby that the marigolds did not grow.....

We had dropped our seeds in our own little plot of black dirt just as Pecola's father had dropped his seeds in his own plot of black dirt. Our innocence and faith were no more productive a than his lust or despair. What is clear now is that of all of that hope, hear, lust, love, and grief, nothing remains but Pecola and the unyielding earth. Cholly Breedlove is dead; our innocence too. The seeds shriveled and died; her baby too (5)

特に *Quiet as it's kept*, という最初の語り口は黒人口承文体の最たるものだと作者は言う。⁽⁷⁾ 子供が大人の語り口を真似て、しかも秘密の話を小声でひそひそ打ち明ける語りはいつのまにか読者を取り込んでしまう。そしてこれから起こる恐ろしい世界へと突き進んでいく。この語り手が9才の少女クローディアであることは後でわかるのだが、四季に分けられたどの章もまずクローディアが子供の平易な言葉で語り、やがてそれが含蓄ある重厚な文体と語彙を駆使して黒人社会と大人たちが直面するいろんな問題や葛藤、あるいは苦悩を成人したもう一人の語り手が語るという手法をとる。しかも四つの季節は「秋」から「夏」へと語られていくが、それは自然の流れに従うものではなく、悲劇のヒロイン、ピコーラに関する物語が“意識の流れ”の手法で語られていく。しかもブリードラヴ家の父チョリーと母ポーリーンの物語になると、あの乱れた「読本」の部分がそのタイトルとして蘇ってくるのである：

the family mother father dick and janel live in the green and white house

theyarevery

このように一寸の緩みもなく、引き締まった構成と野心的な技法を駆使した処女作はそのままモリスンの今後の創作態度を宣言している。モリスンはいつも新しい試みと工夫を凝らさずにはいられないのだ。これまで7つの小説において二度と同じ技法を使ったことはない。常に新しいものに挑む作家としての使命感と気迫がありありと伺える。

『青い眼が欲しい』は黒人少女ピコーラの悲劇を描きながら、反面白人社会の価値観にどっぷり浸かって黒人としての自己認識を失いかけている現在の黒人とその社会に対して、モリスンは意識の覚醒を訴えたのだ。歯がゆさと憤りを感じつつも、同時に重い過去の歴史を背負う黒人に静かに燃えるようなモリスンの熱い思いが伝わってくる。この小説は多分に自伝的な作品であり、「青い眼」を欲しがる悲劇のヒロイン、ピコーラをだれよりも気遣う語り手クローディアは作者モリスンの分身に思えて仕方がない。

3 クローディアの反抗とピコーラの不安

白人の女に連れられて何一つ持たずにピコーラはクローディアたちの家に連れて来られた。一時預かることになった The MacTeers(マクテア家)ではクローディアと姉のフリーダが彼女を歓迎する。シャアーリー・テンブルのシルイットのついたミルクのコップを手にしたピコーラはうっとりとその絵に見とれていた。やがてフリーダとピコーラはシャアーリー・テンブルの美しさを称えあって楽しく会話が弾むのだが、クローディアはその仲間には加わらなかった。自分の好きなボージャングルとシャアーリーが踊ったのが気に入らず、シャアーリーをうとましくさえ思うのだった。そんな他愛もない理由から青い眼の抱き人形にクローディアは愛着が持てない。世間の大人たちは白い肌の青い眼をした人形こそ女の子が一番喜ぶものだと思込んでいる。そしてクリスマス・プレゼントに大きな青い眼のベビードールが買い与えられた。クローディアは戸惑う：

What was I supposed to do with it? Pretend I was its mother? I had no interest in babies or the concept of motherhood. I was interested only in humans my own age and size.(20)

クローディアにはその丸い白痴のような眼、パンケーキみたいな白い顔、オレンジ色の髪がむしろ恐かった。どの絵本を見てもベビー・ドールを抱いている女の子の写真ばかり。人形を抱いて揺り動かせば、“ママー”と泣く。だれもがその声を聞いて、なんてかわいい声なんだろうと言う。クローディアの好奇心はみんなが美しいというその人形の正体を暴こうとする。手足を離し、頭を抜いて人形をばらばらに解体してしまう。両親からきつく叱られた彼女はしかしなぜ自分が人形を壊した

のか、答えることができなかった。9才のクロードに白人社会が押し付けた美醜の基準に反抗する意識などあろうはずはない。だとすると本当の不満はなんだったのだろう：

I did not know why I destroyed those dolls. But I did know that nobody ever asked me what I wanted for Christmas. Had any adult with the power to fulfill my desires taken me seriously and asked me what I wanted, they would have known that I did not want to have anything, or to possess any object. I wanted rather to feel something on Christmas day.(22)

クロードが欲しいのは人形ではなく、大人たちの思いやりだ。だから「クロード、なにが欲しいの？」と聞いて欲しかったのである。これはピコーラが、「青い眼」が欲しいと実現不可能な願いを抱くことと同根である。自分を認めて欲しいという願望は子どもだけの問題ではないが、これは子どもが親に対して持つ当然の期待であり感情である。しかしピコーラの母、ポーリーンは白人家庭のメイドとなって自分の家庭を捨てた。娘のピコーラを一度も抱きしめたことがないポーリーンはなぜか働いている白人家庭の娘をまるで母親のようにいたわり抱きしめる。そこには黒人女ポーリーンではなく、白人家庭のメイドとしての彼女があり、誰もがそれを認めてくれるからだった。黒人の己のアイデンティティを、存在価値を求めていく姿はその後のモリスン文学の重要なテーマである。これは特に第2作『スーラ』においてボトムの黒人社会から追い出され、自分の魂の拠り所を求めてさまよう薄幸のヒロイン、スーラの生き様に見事に収斂していく。

ある日ピコーラを狼狽させる事件が起きた。庭で遊んでいた彼女に突然初潮が襲ったのである。なにがあったのか分からないクロードと、ただおろおろするピコーラにてきぱきと指示を与え、後始末をしてくれたフリーダにピコーラはその夜少女の不安を打ち明ける：

"Is it true that I can have a baby now?"
"Sure," said Frieda drowsy. "Sure you can."
"But... how? Her voice was hollow with wonder."
"Oh," said Frieda, "somebody has to love you." (32)

ピコーラはどうしたら彼女を愛してくれる人が見つけられるのか、フリーダに聞くのだが、眠気に襲われてきたフリーダは答えなかった。黒人少女ピコーラが女へと飛翔したこの幸せを、やがて思わぬ悲劇が待っていようとはだれも予見しなかっただろう。作者は巧妙にここに一つの伏線を敷いて次の展開に備えるのだが、こうしたモリスンの伏線の敷きかたは「語り」手法の妙技と言えよう。

4 "I Am cute. You are ugly!"

ブリードラヴ家は貧困にあえいでいただけでなく、世間から完全に無視されてもいた。黒人社会からさえ相手にされなかった彼等は崩れかた倉庫の裏側に住んで、以後ずっとそこから離れたことがない：

They lived there because they were poor and black, and they stayed there because they believed they were ugly...[They]wore their ugliness, put it on, so to speak, although it did not belong to them. (38)

世間から “You are ugly people.” とののしられ、その「醜さ」をまるでマントでも羽織るように身に纏って生きていた。ピコーラの兄サミーはそれを他人を脅迫する武器に使えたが、ピコーラは「醜さ」という仮面の中に閉じこもり、そこから外をのぞき見ることもさへしなかった。少女は自分の思いを声に出すことすら失っていた。彼女のこの沈黙がそのごの運命を悲劇的なものへと導いていく。近くの駄菓子屋の店主ヤコボースキーは黒人少女は人間とは映らない。カウンターからぬ一っと現れて、なにが欲しいと聞くものの、決してピコーラを見ない。そっぽをむいたその眼には少女ピコーラの姿は映っていない：

She[=Pecola] looks up at him and sees the vacuum where curiosity ought to lodge. And something more. The total absence of human recognition -- the glazed separateness.(48)

ピコーラは蝦のなくような小さな声で、“メアリー・ジェイーン” キャンデーを指差して、「これ・・・」と言う。そしておどおどしながらペニー硬貨3個を差し出すと白人店主は触るのも汚らわしいと言わんばかりに硬貨をひったくる。店を出たピコーラは異体の知れぬ恥ずかしさに襲われるが、“オール・メアリー・ジェインズ”の包み紙を眺めるとそれまでの哀しい気持ちが消えていく。口に入れると自分が“メアリー・ジェイーン”になれるような気がするのだった：

A picture of little Mary Jane, for whom the candy is named. Smiling white face. blond hair in gentle disarray, blue eyes looking at her out of a world of clean comfort... To eat the candy is somehow to eat the eyes, eat Mary Jane... Be Mary Jane. (50)

モーリーン・ピールという少女がピコーラたちの学校に転校してきた。お金持ちで黒人にしては色が薄く、髪はブロンドだった。黒人の女の子たちはいつも彼女の回りを囲んでいた。白人の女の子も、先生もモーリーンには気をつかった。ピコーラは遠くから彼女を見ることしかできない。そんなある日帰り道でピコーラはまた男の子にいじめられた。この時はフリーダが大声を上げて男の子を追っ払ってくれた。それを見たモーリーンが急にピコーラに近づきキャンデーを買ってやると言い出した。そしてクロードたちにあなたたち買わないの？と嫌みたっぷりに言う。同じ黒人の少女なのに、色が薄いというだけで優越感を持ったモーリーンがわ

たしのお父さんはクローン坊なんかじゃないんだと言ったのがきっかけで、4人は口論になった。クローディアたちの罵倒の言葉と激しい気迫に押されて、道路の反対側に逃れたモーリーンは大声で罵り返してきた：

“I AM cute! And you are ugly! Black and ugly black e mos. I AM cute!”
(73)

モーリーの「わたしは美しいのよ！あなたは醜い！」という言葉がクローディアの頭を離れない：

If she was cute -- and if anything could be believed, she was -- then we were not. And what did that mean? We are lesser.(74)

クローディアは考える：もしそうだとしたら、肌の白い黒人のほうが黒い黒人より優れているということになる。いくら賢くても、強くてもだ。人形は壊せても、モーリーンを見る先生たちのあのやさしい眼の輝きは壊せない。わたしたちは自分たちの黒い皮膚に満足し、汚れがついていてもむしろ誇らしく思うことができるわ。でもこの「値打ちなし」がなぜわたしたちより優れているのか理解できない。モリスンは成人したもう一人の語り手クローディアにこう答えさせている：モーリーンはわたしたちの敵ではないわ。本当の敵は彼女を美しいと言わせているものよ、と：

Maureen Peel was not the Enemy and not worthy of such intense hatred. The *Thing* to fear was the *Thing* that made her beautiful, and not us.(74)

世間で通っている“美しさ”はクローディアたちにとっては「値打ちなし」(the unworthiness) だが大人たちはだれもそれに気づこうとはしない。世間で言う、「美しい」という基準こそ問題なのに。だが、少女クローディアにはどうすることもできない。いくら歯ぎしりしてもかなう相手ではないのだから。しかしこの“美しさ”と言う怪物がやがてはピコーラを狂人へと追い詰めていく凶器となることを黒人社会は知っていたのだろうか。白人の言う「美しさ」は黒人から黒人を疎外させ、そして殺してしまうほどの恐ろしい魔力を持っていることを大人たちは考えようともしない。モーリーンが自分が黒人であることを棚に上げてより色の黒いクローディアを「醜い！」と叫んだのも、白人の「美」意識を鵜呑みにしている黒人社会にいればこそ有効なのである。なぜ黒人たちは自分たちの中にある美しさに目を開かないのか。モリスンはかつて“Black is beautiful”という、黒人サイドの公民権運動のスローガンを非難したことがある。それは、もしこれを是認すれば白人による定義が重要だという考えを逆に認めることになるからだというのである。“Black is beautiful”と声高に叫べば叫ぶほど白人の美醜の基準を自分たちで肯定していくことになるのだと。

5 ソープヘッド： 神の代理

ピコーラの家近くに3人の娼婦が住んでいた。だれも近づかない彼女たちの家にピコーラはよく遊びに行った。クローディアたちがそれを咎めると、ピコーラはみんなそう言うけど決して悪い人ではないと言う。世間からも、学校友達からも醜いクロンボといじめられ、嫌われ、相手にしてもらえなかったピコーラ、母親からは虐待こそされ、愛のかけらひとつも与えられないピコーラ、駄菓子屋の店主は彼女を人間としてさえ認めなかった。そんなピコーラにとってはこの3人の娼婦こそ唯一彼女を受け入れてくれた人たちだったのだ：

“I don't know. She say she's bad, but they ain't bad. They give me stuff all the time

“What stuff?

“Oh, lots of stuff, pretty dresses, and shoes. I got more shoes than I ever wear. And jewelry and candy and money. They take me to the movies, and once we went to the carnival.(107)

だれからも人間扱えしてもらえない苦しみほど悲しい事があるだろうか。このテーマはその後の第5作『ピラブド』において、人間性を奪われて生きていく奴隷に戻すくらいなら、ひと思いに命を断ってやるほうが母の本当の愛であると、「娘殺し」という大罪を犯すセッサの物語に結晶していくのである。

ピコーラは世間からも母親からも捨てられて倉庫裏の家で暮らしていたのであるが、ある日飲んだくれて家に舞い戻ってきた父チョリーはそんな薄幸なピコーラを見てなぜか手を伸ばし娘に触れようとした。が、それが思わぬ結末を招くことになってしまう。バランスを崩して倒れたピコーラ素足が眼に入ったチョリーは忘れていた妻ポーリーンのそれを思い出して、こともあろうに娘を陵辱してしまう。しかしモリスンはこの間違ったチョリーの、とんでもない愛の発露についてこう語っている：

“(The rape is) as awful a thing as can be imagined, (but) I want you to look at him and see his love for his daughter and his powerless to help her pain, By that time his embrace, the rape, is the all the gift he has left.”⁽⁸⁾

さてこのことを後で耳にしたクローディアたちの悲しみと驚きは計り知れないものだった。クローディアは “The love of a free man is never free,” と怒りを投げつけるがしかし（娘に対する）チョリーの気持ちに一定の理解を示すのである。少なくとも触ってやるだけの愛があったのだと：

“He, at any rate, was the one who loved her enough to touch her, envelop her, give something of himself to her,”(159)

それにしても、かつて初潮のあと「わたし・・・赤ちゃんが産めるの？」とあんなに無邪気にフリーダに尋ねたピコーラだったのに。それを人でなしのチョリーに犯させるとは、神はなんと惨いことをするのか、とクローディアは思った。しかしすべての出口を塞がれたピコーラはとりつかれたように毎晩その神に祈っていたのである：青い眼を下さい、青い眼さえあれば世界が変わるかもしれないのです、わたしは美しくなれるのです、美しくなればみんながわたしを見てくれるのです、と。思い詰めたピコーラは最後の救いを怪しげな星占師に求めていく：

Opening it(=the door), he saw a little girl, quite unknown to him.
“What can I do for you?”
“I can’t go to school no more. And I thought maybe you could help me.”
“Help you how? Tell me. Don’t be frightened.”
“My eyes.”
“What about your eyes?”
“I want them blue.”(174)

シナモン色の眼をした西インド諸島生まれのこの星占師はかつてのイギリス貴族、Sir Whitcomb の血をひく男で、いろんな片手間仕事をしながら白人社会を渡り歩いて来た後、ようやくここオハイオ州ロレーンにやって来た。そしてある日突然自分には超能力があると悟り世間からソープヘッド・チャーチと呼ばれる霊媒師に変身したのである：

“I can do nothing for you, my child. I am not a magician. I work only through the Lord. He sometimes uses me to help people. all I can do is offer myself to Him as the instrument through which he works. If He wants your wish granted, He will do it.”(174)

救いを求めてやってきたピコーラにこのいんちき霊媒師はその願いを己のちゃちな欲望のために悪用してしまう。日頃汚くて臭い家主の老犬を追っ払いたと思っていたソープヘッドは毒入りの腐肉を犬に与えさせ、もし犬が異常を訴えたら、それは神がピコーラの願いを聞き入れてくれた証である。だがなにも異常が起きなければ、願いは受け入れてもらえなかったと思うのだ、とピコーラに教えた。案の定肉を食べた犬は苦しみながら死んでいく。ソープヘッドの策略にはまったピコーラは、神様はわたしの願いを聞き入れてくださったと信じてしまう。わたしは青い目になれたのだと。勝ち誇ったインチキ霊媒師ソープヘッドは神に手紙を書くことにした：

Dear God:

Do you know what she came for? Blue eyes. New, blue eyes, she said. Like she was buying shoes. “I would like a pair of new blue eyes.” She must have asked you for them for a very long time, and you hadn’t replied.... She came to *me* for them...I gave her those blue eyes she wanted. Not for pleasure, and not for money. I did what You did not, could not, would not do.

..I, I have caused a miracle. I gave her the eyes. I gave her the blue,blue,two blue eyes.A streak for it right out of your own blue heaven. No one else will see her blue eyes. But she will . And she will live happily ever after. Now you are jealous. You are jealous of me....

With kindest regards, I remain,
Your, Elihue Micah Whitcomb.(182)

フェミニズム批評の立場に立てば、悲劇の少女ピコーラは父と神（の代理）といういずれも男性によって、前者からは肉体的に陵辱され、後者からは精神的になぶり殺しにされたのだから、これこそまさに男性優位の社会がもたらす悪であり、痛烈に批判されてしかるべきものだろう。むろんそのような解釈も成り立つが、モリスンのその後の作品の展開を検証してみると、なぜわれわれは神に救いを求めるのかという宗教と信仰の問題がすでにこの処女作に芽生えてのである。それは最近作『パラダイス』を読んで納得がいくことだが、だとするとソーブヘッドと神とのテーマはこの『パラダイス』という作品において文学的結実をもたらしたと言えよう。

さてこの「神の言葉」、「神の沈黙」についてわれわれ日本人は遠藤周作の『沈黙』を想起する。拷問に苦しむ隠れキリシタンの叫び声に対し神はただ沈黙をのみ守りつづけるのである。それでも彼等は棄教を拒み、神の救いを求めたのは一体なぜなのか、「パライソ」という理想の国を夢見ている信者だからなのだろうか。考えさせられる。興味あることにモリスンは「パラダイス」はどこにあるのですかという質問に答えている：もともと神がわれわれの願いを聞き入れてそれがみな成就できればわれわれはすでにパラダイスにいるようなものではないか。だとすればもはやここはパラダイスではないということにある。われわれが求めるパラダイスというものがどこにあるかは分からないが、ただそれはわれわれの心の中にあるのではないか、だからダンテの描くパラダイスなどとは違うはずだとインタビューで答えている。⁽⁸⁾

6 「青い眼」と狂気の世界

やがて夏がやって来た。クローディアたちが待っていた種の袋が届いた。さっそく彼女たちは1袋5セントで売りに出た。油やトイレの臭いのする家や、木造のちっちゃな家、藪の中に半分も隠れている家にも行った。種を売ったお金で自転車を買うことにしていたクローディアたちは大人の会話などに聞き耳をたてる暇などなかった：

“Did you hear about that girl?”

“What? Pregnant?”

“Yeah. But guess who?”(189)

このピコーラの噂話しが聞こえてくると、彼女たちは立ち止まるのだった。ピコーラを妊娠させたのはチョリーであり、母親ポーリーンがそのことでピコーラを激

しく折檻し、「あの娘が生きていられるのも不思議なくらいだ」と大人たちは言っていた。クロードイアはだったらだれか一人ぐらいピコーラが気の毒だとか、可哀そうとか慈悲の言葉のひとつでもかけてくれはしないかと聞き耳を立てた。だがそれはついに聞けなかった。大人たちの会話はクロードイアの気持ちを逆なでするものだった。あの娘の上にごみを投げ棄て、あの娘にそれをみんな吸収させ、あの娘の上で身体を洗って、自分たちはとても健康になったとか、あの娘の醜さの脇に立てば、とても美しくなれるし、彼女の素朴な心は自分たちを飾り、彼女の罪は自分たちを神聖にしてくれると言ってはばからない。ピコーラを嘲笑することで、大人たちは逆に自分たちの心の平穏と慰めを得ているのであった。黒人が黒人を差別して苦しめている。クロードイアたちは憔悴しながらもせめてピコーラが無事に赤ん坊を産んで欲しいと願った：

“What can we do? Miss Johnson said it would be a miracle if it lived.”

“So let’s make it a miracle.”

“Yeah, but how?”

“We could pray.”(191)

祈るだけでは奇跡は起きないと自転車のお金をピコーラの家が一番近い所に埋め、マリーゴールドの種を裏庭に蒔いて、もし花が咲いたら神様が自分たちの願いを聞き入れてくれた証しだ、そしたらきっとピコーラの赤ちゃんも丈夫に生まれるはずだと、二人は祈るのだった。

だがクロードイアたちの祈りも空しく、ピコーラの赤ちゃんは死んだ。そして今ごみ捨て場のまわりを毎日徘徊しているピコーラの姿を見ることはクロードイアにとってもっと辛いことだった。それなのに大人たちはクロードイアたちの心の悲しみに気づくものは誰もいなかった。これを「贖罪の山羊」現象と捉える評論家もいる。あらゆる罪を背負わせて山羊を荒野に追い出した罪深い人間の行為の再現だから。しかも神の代理を勤めたとうぬぼれているインチキ霊媒師ソープヘッドによって、決定的にピコーラは「贖罪の山羊」⁽⁸⁾にさせられてしまったのだ。

黒人が黒人をスケープゴートにするという哀しさと愚かさを描いたモリスンはこの人間の心の中に巢食う悪に打ち克つためには当事者たる黒人の意識の覚醒こそ必要だと訴えているのだろう。しかしこれは黒人にだけ求められる課題では決してない。人間すべてに課せられた課題なのである。この人間性の善と悪の追求はその後のモリスン文学に繰り返し検証されていく重要なテーマとなった。青い眼に魅せられたピコーラの物語、『青い眼が欲しい』はこれまで検証してきたように、モリスン文学のその後を語るに不足のない傑作である事が確認できたと思う。

ピコーラは暗い狂気の世界をさまよいながら、今なおもう一人の自分に問いかける：わたし、ほんとに「青い眼」しているかしら、と：

“ But suppose my eyes aren’t blue enough?

“ Blue enough for what?

“ Blue enough for .. I don’t know. Blue enough for something.

Blue enough.....for you!(203)

しかしなぜ？何のために？

Pecola が “Blue enough” と言える日ははたして来るのだろうか。現実の苦しみから逃れようと渴望したその「青い眼」も究極の救いにならなかったとしたらピコーラにはさらなる苦難の旅が続くはず。白人社会の美醜の基準に翻弄された黒人の愚かさは同時にわれわれすべての人間の愚かさでもある。モリスンは一人の黒人少女を描くことで、肌の色や人種とは無縁に襲ってくる不条理が支配する現実をわれわれの目前に突きつけたのだ。それゆえに前述の：“It(=Race) is real information, but it tells you next to nothing.” というモリスンの言葉が力強い説得力を帯びて聞こえてくるではないか。今やモリスン文学は 単なる “Racism” との格闘や民族として黒人の復権を求める、いわゆる「黒人文学」という域を大きく超えて全ての人間に共通な普遍性ある文学へと脱皮したのであると筆者は思う。

それにしてもピコーラのその「青い眼」に一体なにが見えるのだろう。

(了) [1998/10/30]

Afterword: About *Toni Morrison*

Toni Morrison was born in Loraine, Ohio, in 1931. She attended Howard University, then received a master’s degree in English at Cornell University, where she wrote a thesis on William Faulkner. Her first novel, “The Bluest Eye,” was published in 1969, followed by “Sula” in 1973. Then came “Song of Solomon” (1977), which won the National Book Critics Circle Award for fiction, “Tar Baby” (1981), and “Beloved” (1987), which received the Pulitzer in 1988. Her novel “Jazz” appeared in 1992, and in 1993 Morrison was awarded the Nobel Prize for literature. Her 7th novel “Paradise” was published in 1998. Morrison now teaches fiction writing at Princeton University.

... from: The Salon Interview: Toni Morrison, Internet.

(注)

注⁽¹⁾ : “The Pain of Being Black”, TIME May 22, 1989.

注⁽²⁾ : 『白さと想像力』トニモリスン著、大社淑子訳、p34-35、朝日選書 499

注⁽³⁾ : “I did that on purpose,” Morrison says. “I wanted the readers to wonder about the race of those girls until those readers understood that their race didn’t matter. I wanted to dissuade people from reading literature in that way.” And she adds: “Race is the least reliable information you can have about someone. It’s real information, but it tells you next to nothing.” ... from : Paradise Found, Internet.

注⁽⁴⁾：第1回トニ・モリスン学会(The First Biennial Conference of Toni Morrison's Society, "Toni Morrison and the American South")がGeorgia State Universityで開催された[1998/9/24-27, Atlanta, Georgia.]。今回"An Evening with Toni Morrison"と題して開催されたモリスン女史自身の『パラダイス』の朗読会があった。筆者は彼女のスピーチを聞きつつ黒人女性作家としての彼女の自覚と使命感というようなものをひしひしと感じずにはいられなかった。「基調講演」をしたDr. Karla Holloway(Duke University)教授がモリスンという作家はヒロインの黒人一人一人を描きながら実は黒人の過去の歴史を語り、また語ることを通して黒人の苦悩を癒す仕事をしているとも言えると語ったが筆者も全く同感である。壇上の女史は言葉を一つ一つ慎重に選んで、ときにはユーモアも交えて質問に答えられていたがその姿は実に印象的であった。

注⁽⁵⁾：from: The Salon Interview: Toni Morrison, Internet.

注⁽⁶⁾：The opening phrase of the first sentence, "Quiet as it's kept" had several attractions for me. First it was a familiar phrase, familiar to me as a child listening to adults; to black women conversing with one another, telling a story, an anecdote, gossip about some one or even within the circle, the family, the neighborhood. The words are conspiratorial. "Shh, don't tell any one else," and "No one is allowed to know this." It is a secret between us and secret that is being kept from us.(212) from "Afterword".

注⁽⁷⁾：Toni Morrison, "The Bluest Eye" New York: Alfred A. Knopf, 1993.p22. 以下本書からの引用は括弧内にページ数のみ記す。

注⁽⁸⁾：the goat shall bear all inequities upon him to a solitary land; and he shall let the goat go in the wilderness. *Leviticus* 16:22